◇極め人に聴く◇ 46

行動力が引き寄せたご縁

壁画家
田村（たむら） 能里子（のりこ）

田村　能里子 氏

聞き手
室舘（むろだて） 勲（いさお）
（株式会社 潮流社 代表取締役社長）

65作品の壁画

――田村先生は、豪華客船「飛鳥」シリーズをはじめ、国内外さまざまな場所の壁画を描かれています。月刊カレントの表紙を、昨年まで約30年にもわたりご担当いただきました。ありがとうございました。最近もまた制作活動が活発なご様子ですね。

田村　最近では「飛鳥Ⅲ」のレストランの壁画を制作しました。また、9月26日からは銀座和光にて素描展（詳細は巻末広告を参考）を開催いたしますので、その制作に鋭意取り組んでいるところです。

――展覧会、おめでとうございます。

田村　今回は素描展といってデッサンを展示します。人物画の素描展って、あまり皆さんはしないですね。風景よりも人物が難しいのもありますから。大体、幅1m、高さ2mのキャンバスに人物を素描しています。ホールの中央には飛鳥Ⅲの壁画を展示します。周りには素描で、どんな絵が元になって、最終形が生まれてくるのか、という比較展示でもあります。来年、飛鳥Ⅲが就航予定ですから、その壁画も楽しみにしていただければと思います。

　飛鳥Ⅰのときには、造船中の船に乗り込んで、ゴンドラでぶら下がりながら描いたものですから、思い出深いですね。飛鳥Ⅲということなので、張り切ってやらせていただきました。

――壁画というと、場所も違えば大きさも違うので、我々のイメージする油絵とはまったく違いますね。

田村　壁画は半永久的に残ります。通常の絵は人の手に渡ってしまったら、作者である我々ですら会いたくても会えない場合もありますが、壁画でしたら飾られている限り会いに行けます。

　そして場所が違う。病院、名古屋や札幌の駅のコンコース、競馬場、ホテルなど、場所もさまざま、大きさもさまざまですね。幅が数十メートルとかありますから。

――大きな壁画を描くときは、小さく描いてから大きくするんですか。

田村　皆さんそうおっしゃいますが、違いま

す。現場に行って、どういう環境かなということを見てから構図や描きたい絵を決めます。そして、直接その現場で下書きを行います。事前にいくら図面と数字で打ち合わせしていても、実際の現場はわかりませんから。建物が建築中の場合もあれば、ほぼ完成している場合もあります。向こうの現場次第で決めていました。壁の色や廊下の通路の雰囲気とかもわかりますので。天井にどんな設えがしてあるかなとか。逆に、そこも含めて私に信頼して依頼してくださっていることが多いです。

――普通、画家の方は、描きたい絵を描いて、その絵をどこに飾ろうかなと考えると思いますが、田村先生の場合は、現場に行ってここに何を描こうかなと考えるわけですね。その場で、見る人の気持ちなどを重視されるのでしょうか。

田村　そうですね。まずどんな角度で見るかとか、首を上げてみるのか、目の前にあるのかなどですね。

たとえば北海道の札幌駅のコンコースの壁画を手掛けた際は、通勤時に凄い大量の人が、すごいスピードで通り過ぎます。ちょっと見るかどうか、というくらいで急いで会社に行くという感じで。帰りにちょっとゆっくりちらっと見る。そのときの癒しになればと思って描きました。

――銀座のファンケルさんのブルーの絵は大好きですね。

田村　前日から泊りがけで現場に行って、ブルーにしようと決めました。私の作品は赤がテーマカラーでもありますが、銀座に爽やかなブルーを入れようと思って。ファンケルさんのイメージにも合わせた形です。絵のタイトルも「FUN-FUN」と言って、ファンケルのファンも入れて、気分良くという意味の「FUN-FUN」としました。

心を癒やすつくし

――北里大学病院の壁画の話を大村智先生の講演で伺いました。「つくし」の話に感動しました。

田村　大村智先生に請われて、北里大学病院の壁画を担当しました。そこには294本の「つくし」を描き込みました。元々、病院の設立が「土筆ヶ岡養生園」に起源を発するそうで、現在でも「つくし会」があるなど、つくしをモチーフとして大切にされているそうです。そういったお話を伺いまして、つくしを部屋数に合わせて描き込みました。すると今では、看護師さんが患者さんに「あなたのつくしはあれよ、あのつくしのように、早くあなたも元気になってお外に出ていきましょうね」とお話するそうです。大村先生も喜んでいました。

――見る人によって、絵の表情とか骨格とかはどういう微調整しているんでしょうか。

田村　それはやっぱり目的ですね。この絵を見る人は、何を求めているのだろうかと。病院だったらやっぱり、「元気になって早く良くなって外へ出たい」という想いがあると思います。それを意識しています。ただ本来、そこに描かれたものを見た人が、どう思おうと本当は自由なんですよね。

だって、その人それぞれにみんな心の状態とか気持ちも状況も違っているわけですから。絵を通じて対話ができてほっとされたり、嬉しくなったり、元気が出たり、目的は皆さんが感じてくださればベストですね。世に放り

出した絵ですから、キャッチするのは皆さんの自由です。

お寺の襖絵なんかも担当しましてね。京都・天龍寺宝厳院には、56枚も描きました。私はお寺って男の人しか関わっちゃいけないんだと思っていました。私は女だけどいいんですかと問うと「もちろん」って。やっぱり時代もいろんな意味で少しずつ変わりつつあるんだなっていうのを感じ取りつつ、使っちゃいけない色もあるのか、と聞くと「田村さんに任せるよ」とおっしゃるんです。それで、制作しました。やっぱりお寺ということで33体の仏様を入れました。それで和尚に後でどうですかと聞くと「僕の思っていたとおり」だとおっしゃる。

私の絵を見て、自由に感じてくださると良いと思います。若い人が絵を見て、床に横になっているおじいちゃんの絵を指差して「あ、うちのおじいちゃんみたい」とかね。そんな風にして親しんでくれているんだなと思います。

ですから、受け止める方はいろんなふうに感じていただけば幸いです。心が休まるという人もいれば、元気が出たとか、人生っていうのはこんなもんねっていう人もいれば、いろんなお話を伺うんですけど、それが喜びですしね。そんなふうに考えて、ここまでいろいろ描いてきました。

そのお寺の襖絵は、日本橋の高島屋本店で、催事場にて展覧会になりました。そのとき、当時の美智子皇后陛下（現・上皇后陛下）もいらしてくださいました。

——上皇后陛下が。それはすごいですね。

田村　上皇・上皇后両陛下が初めて中国入りされたのが西安だったんですね。私の壁画処女作が西安の日中友好の合弁でつくったホテルの60mを回る壁画です。日中友好のホテルですから、上皇・上皇后両陛下も当時、ご見学されたそうです。

横浜コンサートホール、高崎信用金庫、京都のトロッコ鉄道の駅舎。みんな一つ一つ目的が違いますからね、一つ一つ工夫してやりましたよ。いまでは全部で65作品になりました。楽しんでやっていますよ。

行動力が生む出会い

——田村先生のお生まれはどちらですか。

田村　愛知県生まれです。小さな頃からお絵かきが好きで、興味もあって、旭丘高校なら美術科があるぞということで、名古屋の旭丘高校美術科に進みました。良い先生との出会いがありまして。ジーンズでかっこよくお花を抱えて、その雰囲気がかっこよくてですね、良いなと。そんな程度だった。その先生に絵を習い続けて、高校を卒業してからもしばらく通っていました。

高校卒業後は、東京に出て武蔵野美術大学に行きました。学校の勉強もして、絵に関わっていられるということが楽しみでしたね。当時の東京は、皆が前を向いて、高度経済成長に向けて燃えている社会だった。

——古き良き日本ですね。

田村　夫の転勤の都合でインドに4年間いました。日本に帰ってきて、それでもインドのある1冊の壁画の画集が心に残っていて。そこから数年経ってからの30代前半だったと思

います。「インドにやり残したことがある」と思って、1人でインドに旅立ちました。当時、壁画といったら中国やヨーロッパですから、インドの壁画なんて誰も知らないわけです。そのインドの壁画を絶対見てみたいと思っていました。だからその壁画集を手に、インドへ旅に出たんです。

インドの、日本から一番遠いあたりにラージャスターン州という地方がありまして、西部にタール砂漠があるんですね。このタール砂漠に行きたかったのです。そこに向かう途中で、列車のコンパートメントで一緒になったのが、ジュンジュヌの学校の校長先生一家でした。「行ってもホテルはないよ。僕の家に泊まって見たいものを見ればどうかな」と言ってくれました。「迎えの車が来ているから」と言うので、トヨタか日産の自動車が来ているかと思ったら、ラクダと荷馬車でした。それで移動して、使用人が寝泊まりしている部屋を貸してもらって。

ジュンジュヌは本当に街中が壁画で埋め尽くされているんですね。洞窟だけではなくて、各自の家の中、キッチンの壁、寝室の天井、玄関。一軒だけじゃなく街中です。昔、大金持ちのマハラジャが、この茶色のベージュ色の砂の街を、カラフルな街にしたいと、手を尽くしたそうです。

それが私の壁画との出会いで。それを見て私も絵描きとして「いつか壁画をやってみたいな」という想いが芽生えました。ただ、壁画というのは自分が描きたくても、依頼がなければ描けません。

いつか描けたら良いなと思っていたら、42歳くらいのとき、文化庁の助成で、各分野から留学生を募っていたので応募して、文化庁芸術家在外研究員に選ばれました。私はインドできっかけをもらったので、初めては中国、というイメージがあったんですね。それはインドから中国、日本という、仏教の通り道じゃないけど、つながりを感じていたからなんですね。やっと思いが通じて、中国の北京中央美術学院に寮を取りましたから、そこに留学してください、と。行く場所も決まった。

留学中、中国の奥地の砂漠にも行きたかったので新疆ウイグル自治区に行きました。私はそういうところにうずくまって佇んでいるおじいさん達に興味が湧きまして。砂漠の埃にまみれて、長靴のようなブーツを履き、寒いときも暑いときもモコッとした服を着て。なにかその風景を見たときに絵描き心を刺激されまして。現地のおじいさんばかりを描きました。そこで数ヶ月暮らして、よし帰ろうと。その帰りに西安に寄ったときに、「ホテルができるんだけど、何か絵を入れたいという話になっている。油絵の予定だったが、壁画という話になっている。どうかな?」と話をいただいて。心のなかでは「え、壁画なんて描いたことない。でも一度やってみたいと思っていた」という想いがあって。聞いたら60mということで。えぇ、と驚きながらも、ぜひチャレンジしたいと思ってお引き受けしました。良い経験をさせていただきました。

それが中日友好の証として、日中合弁で建設されるホテル「唐華賓館」でした。

建築段階から、幅60mの四方を囲む壁に壁画を描きます。まだ屋根がない状態から、足場を組んで描いていました。全部で1年半をかけてやります。夏は40℃と暑く、冬は零下

10℃と極寒。酷寒酷暑です。寒いときはコートを着てもこもこしていました。現場では水道も通っていないから、道具を水洗いする手伝いをしてくれる広東人がいました。現地の人が「遠いところでペンキの仕事なんて大変だね」なんて、おイモを持ってきてくれたりしましたよ。1年半後、なんとか壁画も完成しました。このお仕事はいまでも大切なものになっています。四川大地震でヒビが入ったというときには修復にも行きました。

――壁画の初仕事からとんでもなく過酷な仕事でしたね。

田村　はい。当時のインドでの壁画との出会いがあって、中国でのこの壁画を手掛けた経験があって、今があります。すべて、思い立ったら行動、という姿勢から、いただいたからご縁が生まれたのかなと思います。

今では65作品も手掛けさせていただきまして、嬉しい限りです。

――次世代の若者へのメッセージをお願いいたします。

田村　日本人は比較的、美意識というのが苦手な人が多いですね。イタリア人やフランス人は赤ちゃんのときから美意識に触れているようなものですから。でもそれは関係なくて、気楽に絵を見て「あぁキレイだね」と感じてもらえたら良いと思います。美意識なんて、人それぞれの感性で良いのです。そのうちの1つでも壁画に触れて感じることがあれば嬉しいです。私はジュンジュヌの、街中が壁画に埋め尽くされた場所を見て感動しました。そんな、一人ひとりの心の琴線に触れる経験をしていただければと思います。

また、芸術とは、やはり人間にしかできないと思います。人間の手で時間をかけて作られた温かさがあると思うからです。いま、マシンやロボット、AIなどに世界は向かっていますからね。それとは反対方向にあるだろう、人として感じるものを大切にしてもらえると良いですね。アートを難しく考えるのではなく、芸術はアートとか風景とかをボーッと見て「こういうのも良いな」とほっとするような気分になれるようなものになればいいなと思います。

マシンやロボも含めて、その両方が上手に寄り添って、豊かな気持ちでいられると良いなと思いますね。

――ありがとうございました。

■たむら・のりこ■
1988年　愛知県生まれ
1966年　武蔵野美術大学を卒業
1969年から4年間、インドに滞在
1986年　文化庁芸術家在外研修員として北京中央美術学院に留学
1987年　中国西安市にてホテル「唐華賓館」のロビー壁画の制作を開始
1988年　同右壁画「二都花宴図」が完成
以後、中山競馬場、客船「飛鳥」、横浜コンサートホール、名古屋セントラルタワーズ、青梅慶友病院、テルモ株式会社、銀座のファンケルスクエア、京都嵐山天龍寺塔頭宝厳院、ホテル椿山荘東京など、計65作品（2024年8月現在）の壁画を制作

【田村能里子素描展「凛とつややかに」ご案内】
9月26日から10月6日。セイコーハウス銀座6F
セイコーハウス銀座ホールにて。
詳細は本誌裏表紙の広告を参照。

カレント年間購読はコチラ⇩